あとがき

過去の年数が増えてくると、ある節目で過去をとりまとめたくなるのは人間の習性でしょうか、それとも、これもまた^自分ならでは^でしょうか。二〇〇一年七月に冊子にした「哲樂の中庭」から十二年後の二〇一三年暮れから、またそういう思いがわいてきたのでした。

自分の問い続けてきたこと、実践してきたことをなるべく一般化して書こうと試みたのでした。だから書きよどんでしまった。ずるずると持ち越してきた。これでは先に進まないので、この春で区切りをつけることにし、身の丈にあったカタチでとりまとめたのがこの抄録です。

「ガムシャラに、なんて、そんなことしなくていいよ、これまでどおりで」

会社勤めの最後の会社の先輩。事務所開設を決めて、物件探しを始めかけた一九九五年一月中旬。あの阪神あわじ大震災が発生。神戸の自宅が被災し、梅田でホテル住まいとなった先輩が、一人ではつまらないからと夕食に誘ってくれた時。事務所開設を打ち明けて、「どうなるかわからないけど、人生はじめてガムシャラになろうと思って」。そう話したことへの返し。

ちょっと意外な気もしました。あっ、わかっているんだ：。自分で言いながらも、ガムシャラ、たぶん、そうしなければいけないのだろうけど、ガラじゃない。それを言い当てているよう。いい人で、ガキ大将的で、小さいことには頓着しないような見かけの奥に、冷静な目をもっているようで、見直した感。

この十年後に五十五歳の若さで逝ってしまった先輩。言ってもらった時から繰り返し、折にふれ、甦ります、「これまでどおりで」。

「けっきょく結婚して平凡に生きていく？　いや、それはないと思うよ」

「もったいないから止めた？　そういうことをしてはいけない。少々費用はかかっても、自分がそう思ったならそうしないといけない、君は」

独立するずっと前、ほんの雑談の中で別々の人から言われた言葉です。三人の人生の先輩たちは何をどう見て、そう言えたのか。独立し事務所を設けてからは少しわかってきました。今では同じようなことをしています。この抄録もその一環です。

二〇一六年四月二十二日

リー・ヤマネ・清実